



学長メッセージ

鹿児島大学学長 前田 芳實

鹿児島大学は、9学部と9大学院を擁する総合大学です。平成28(2016)年度から6年間、第3期中期目標・中期計画期間に入り、南九州及び南西諸島域の「地域活性化の中核的拠点」として機能を強化し、「進取の精神」を備えた人材を育成するとともに、18歳人口減少問題やグローバル化を視野に入れた4つの基本目標に取り組んでいます。第一はグローバル化を視野に入れた人材育成、第二は大学の強みと特色を生かした学術研究の推進、第三は地域ニーズに応じた社会人教育や地域との連携強化、第四は機能強化に向けた教育研究組織体制の整備です。今日の地方における喫緊の課題は、人口減少に適切に対処し地方創生を推進することにあります。そのため、鹿児島大学は、鹿児島の特性や発展可能性を踏まえ、地域志向型人材の育成に資する中核的拠点として「オール鹿大」で地域創生に取り組んでいます。この本学の目標に沿った事業の一つに臨床心理学研究科の地域支援活動が挙げられます。

臨床心理学研究科は、平成19(2007)年に臨床心理分野専門職学位課程として設置され、平成27(2015)年度からは学術研究院制度のもと、教員組織は法文教育学域臨床心理学系に位置づけられています。本学が進める地域貢献を具現化するものとして、設置当初から臨床心理士養成ならびに附設心理臨床相談室による地域住民を対象とした心理相談活動が挙げられます。さらに平成22(2010)年度には「地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな『実践型教育プログラム』の開発」事業が文部科学省特別教育研究経費プロジェクトにて採択され、現在は本学の地域貢献の一環と位置づけ経常予算化されています。この活動は、教員と学生が協働して様々な地域に出向き、地域のニーズに即した心理支援をデリバリー方式で行う斬新なものです。8年目の現在では、講演活動に加え発達障害児者の初期支援活動、認知症高齢者支援と広がり、地域への定着が認められます。また、国内外の講師を招聘した研修会を複数回開催するなど、学術的な活動も実践しています。これらは、本学並びに臨床心理学研究科の独自性が発揮されたものであり、全国の臨床心理士養成のリーダー的存在である臨床心理学研究科の教育基盤の一つのなってきたと考えます。

今後は、本事業でノウハウを研究科各教員の心理臨床活動に落とし込んでいくと聞いています。引き続き、本学が推進する地域貢献と国際的視野の両方を兼ね備えた視点を学生とともに育み、地域の皆様の心の健康に寄与できる臨床心理学研究科ならではの活動が展開されることを心から願っています。



研究科長メッセージ

鹿児島大学大学院臨床心理学研究科長
プロジェクト統括 中原 睦美

臨床心理学研究科は、平成19(2007)年4月に臨床心理分野の専門職学位課程として臨床心理士養成を主眼として設置され、平成23年度と28年度に受審した認証評価で「適合」と判定され、130名以上の臨床心理士を輩出するなど実績を重ねております。研究科の目標のひとつに「地域文化を理解し支援できる人材」を掲げ、心理臨床相談室活動を継続するに加え、平成22年(2010)年度には採択された文部科学省教育研究経費プロジェクト「地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな『実践型教育プログラム』の開発」事業に着手し、デリバリー方式という斬新な方法で実践し、平成26(2014)年度からは大学の地域貢献事業の一環として「地域支援プロジェクト」名で経常経費化され、活動を継続して参りました。この事業は鹿児島大学の第3期中期目標・中期計画に掲げる『南九州及び南西諸島域の「地域活性化の中核的拠点」としての機能を強化し、「進取の精神」を備えた人材を育成する』と合致する地域貢献活動に位置づけられます。

本事業内容は、講演活動から始まり、発達障害児者の初期支援、認知症高齢者支援に広がり、学生の参加やデリバリー方式による心理支援方略が根付いて参りました。ここで事業としての役割はひとまず終えたと判断し、得られた知見は各教員の心理臨床実践に活かしていく所存です。本事業の8年間を振り返りますと、日本心理臨床学会にての11回の成果発表、年度ごとの報告書の発刊、附設心理臨床相談室紀要への6本の報告など、活動内容を積極的に公開して参りました。また、スウェーデンへの研修視察を始め、国内外の講師招聘による講演会やワークショップ開催などの国際交流も活発に進めて参りました。今後は、認証評価でのご指導をもとに臨床心理分野における地域貢献の中核である心理臨床相談室活動を主軸に、地域の心の健康に寄与して参る所存です。

今回の報告書は、8年間の軌跡をまとめたものです。第1章の事業の概要から始まり、第2章は本年度の活動一講演や各地域での支援活動、国際交流などの報告、第3章は専門職における臨床実践教育プログラム開発や研究発表、国際交流の実績、第4章は8年間の実績と評価ならびに本事業の総括という構成になっております。本事業へのこれまでのご理解ご支援に感謝申し上げますとともに、新たな展開に向け、読者の皆様には、ご感想やご意見をお寄せいただけますと幸いです。